Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

速報 縄文ワクワク体験まつり！

令和元年度企画展示「ひと×いきもの」好評開催中!!

東京都埋蔵文化財センター報 117

速報！縄文ワクワク体験まつり2019

ゴールデンウィーク恒例となった縄文ワクワク体験まつりも、今年で10度目の開催となりました。今年は超大型連休ということもあり、4月末の開催でしたが、2日間で1000人を超えるお客様に参加していただきました。

今回は縄文ワクワク体験まつりの各体験を、いつもより少しだけ詳しく紹介します。

入場すると、まず受付でドングリコインを貰います。ドングリコインは体験まつりで使えるコインで、体験ごとにドングリ一つを払って使います。オリジナルトートバッグと、企画展テーマの缶バッジも一緒に配布しています。毎年デザインが変わるので、楽しみにしてくださるお客様もいます。

次に多くの人が向かうのは「勾玉作り体験」の受付です。どの回もすぐに満席になってしまうほどの人気です。数年前から全ての回に参加しているという筋金入りの勾玉少年もいました。

勾玉作り体験は、滑石という柔らかい石を紙やすりなどで削って勾玉の形に仕上げる体験です。完成した勾玉は紐を通してネックレスのように首から提げることができるので、道中子ども達から「見て！上手にできたよ！」とよく声をかけられます。とてもご満悦のようです。

他に整理券が必要になるのは「発掘体験」です。遺跡庭園の奥に設置した竪穴住居の復元模型に砂を入れ住居の覆土に見立て、そこに埋められた土器や土偶、石器を探す体験です。普段は本物の遺跡を発掘している職員が指導を行い、道具も実際のものに近いものを用意しています。埋められた遺物もリアルに作られており、なかなか本格的です。ここに何かあると思ったのに、と苦戦している子ども達もいますが、実際の発掘調査でもままあることです。

発掘体験の隣には「縄文輪投げ体験」があります。輪投げの的には動物の絵が描いてあり「今夜の夕食のために狩りをしよう」というテーマがあるので、今日の夕飯はシカとクマとカエル、などといった会話が聞こえてきます。輪が縄で作られているためコントロールが難しく、得点率は低めですが、その分やる気が刺激されるのかリピート率は高めです。

遺跡庭園の中央部に向かって歩いていくと、一際目を引く「弓矢体験」の大きなテントがあります。弓矢体験は縄文ワクワク体験まつりでも一、二を争う人気体験で、常に賑わっています。竹製の簡易な弓でイノシシやウサギを模した的を狙う体験です。簡単そうに見えますが、矢を真っ直ぐに飛ばすのにコツが要るため、なかなか難しいのです。

弓矢体験の近く、復元住居前では「縄文コレクション」が行われています。常設にもある、縄文の衣服を再現した体験です。ですが、縄文ワクワク体験まつりでは復元住居の前で撮影が可能、さらに弓や斧などの小道具も撮影に使えるという豪華仕様となっているので、縄文映えのする写真が撮れることでしょう。

遺跡庭園を抜け、ピロティに降りると「火おこし体験」と「クルミ割り体験」のコーナーがあります。

どちらも人気体験で、常に多くの人で賑わっていました。

「火おこし体験」は、舞ぎりという道具で火種を作ります。当センターのシンボルマークにもなっている、あの道具です。軽やかに回るように思えますが、実際には抵抗が徐々に大きくなるため、少しずつ重くなっていきます。疲れた時はスタッフが補佐についてくれるので安心です。火種ができたら着火材に移し、息を吹きかけていきます。大量の煙が出ますが、息を吹き続ければいずれ炎が上がります。東京で生まれ育った子ども達にとってはもくもくとあがる煙は珍しいようで、楽しそうではありますが、匂いを苦手とする子が多いようです。

「クルミ割り体験」は台石と敲石を使い、クルミを割り、試食もできる体験です。クルミは遺跡庭園

で採れるオニグルミという種類で、殻が非常に堅いのが特徴です。叩いていくと、ヒビが入った瞬間にパキッと小気味の良い音がします。うまくいくと綺麗に半分に割れるので中の実を食べるのも簡単です。クルミ割りに楽しさを見出す人、クルミの味に魅了される人が何度も体験に来る、人気の体験です。

施設内に戻ると「ドングリアート」が会議室で行われています。ドングリに油性ペンやポスターカラーを使って絵を描く体験です。同じ部屋にはリアルな立体土器パズルや平面パズルもあるので、小さなお子さんでも楽しめる体験となっています。

今回は縄文ワクワク体験まつりの体験について、いつもより少しだけ詳しく紹介しました。来年も皆さまのご参加をお待ちしております！（髙田優衣）

令和元年度企画展示『ひと×いきもの』好評開催中!!

ひと×いきもの
HUMAN and LIVING THINGS

展示概要

「ひと」と「いきもの」、この２つにはどのような関係性があるでしょうか。食べる、利用する、使役する、愛玩する…現代においても多様でとても一言では言い表せません。では、過去の人々はどうだったのでしょうか。

今回の展示では縄文時代から江戸時代までの動植物・菌類に関わる遺物を集めました。長い歴史の中で人間は自然とどのような関係を築いてきたのか。私たちが過去から学ぶべきことは何か。「ひと」と「いきもの」とはどうあるべきか。ぜひ共に考えてみましょう。

夏休み特別企画

☀

学芸員と一緒に展示を見よう

企画展示『ひと×いきもの』のギャラリートークを以下の日程で行います。皆様のご参加をお待ちしております。

日程	7月25日(木)	8月1日(木)
	8月8日(木)	8月15日(木)
	8月22日(木)	8月29日(木)
時間	各回 10:30 ～ 11:30	
場所	東京都立埋蔵文化財調査センター 展示ホール	
申込	申込不要、自由参加	

遺跡だより 120

港区　大和芝村藩織田家屋敷跡遺跡

やまとしばむらはんおだけやしきあとい せき

所在地：港区白金二丁目４番
調査期間：2018 年５月～ 2019 年２月（発掘）
調査面積：3,800 ㎡

大和芝村藩織田家屋敷跡遺跡は、国道１号線の西側の台地上と斜面上にあり、東京メトロ南北線・都営三田線の白金高輪駅から南西約 100 mという近さにあります。平成 30 年５月７日からの発掘調査で、縄文時代～古代の遺物、近世以降の遺構と遺物が検出されました（写真１～７）。現在二次整理作業が始まったばかりですが、現況について紹介します。

縄文時代の遺物は 150 点ほどが出土しました。多くは江戸時代以前に埋まった中央部の谷の中からの出土です。この谷の深さは、最深部で約４mを測ります。縄文土器の作られた時期は、約 9000 年前の早期後半から約 5000 年前の中期後半に及び、前期前半及び中期前半の土器が多いことが分かりました。石器は石鏃１点を含む数点が出土しました。遺跡は、狩場として利用されていたことが推定されます。縄文時代以降の江戸時代に至るまでの遺物の数は数点を数える程度です。

江戸時代になると大規模な土地改変がなされていたことが、今回の発掘調査で判明しました。調査区には 200 基以上の江戸時代の遺構が残っていましたが、土層の堆積状況等から多くはその後、上面が大きく削平されてしまったようです。

当地は遺跡名にもなっている織田家が屋敷地として拝領していました。大名屋敷地としては、江戸城からは距離があり、また、今よりずっと海が近く、東側約１㎞には海岸線がありました。

織田家というと天下人・織田信長をイメージしがちですが、当然のことながら江戸時代には信長は没しています。この大和芝村藩は、織田信長の弟の有楽斎（長益）を祖とする藩で（初代藩主は四男長政）、１万石という小さな大名でした。芝村は現奈良県桜井市にあり、今のところ港区芝との関連を説いたものはないと思われます。織田有楽斎は千利休の弟子としても著名で、NHK 大河ドラマ『真田丸』では、謀略家としての一面がクローズアップされていたことは、記憶に新しいところです。織田家は幕末の動乱を乗り切り、織田家屋敷は、明治 36 年に織田長純が宇和島伊達家の伊達宗陳に所有権を売買するまで存続しました。大正時代、屋敷に構築された総欅造りの伊達家の門は、江戸東京たてもの園に移築され、往時の雰囲気を残す貴重な文化財となっています。

遺跡からは江戸時代の礎石を持つ建物跡、井戸、地下室、段切り、溝、土坑、ピットなどの遺構が検出され、磁器、陶器、土器、瓦、ミニチュア土器、土製品、木製品、ガラス製品、貝・骨角製品、石製品などの遺物が見つかりました。その数は、極めて多量のものとなりました。

今回はこの遺構の中から井戸と地下室をピックアップし、その特徴と出土遺物について記します。井戸３基は、出土遺物から見ると、19 世紀代のもので、江戸時代の中では比較的新しい遺構に位置付けられます。63 号遺構は直径約 1.3 mの大形の井戸で、井戸枠の痕跡が観察できました（写真２）。出土遺物の量は少なく、陶磁器に混ざって、極めて薄

写真１　発掘調査前全景

写真２　井戸（063 号遺構）土層堆積状態

手のガラス製品や箱庭道具などが出土しています。

66号遺構は、多量の遺物が出土した井戸で（写真3）、完形あるいはそれに近い遺物が多いことを特徴とします。織田家の家紋である「木瓜文（もっこうもん）」をあしらった軒丸瓦の瓦当が出土しました（写真4、5）。また完形の徳利（とっくり）も3点、その他にも醤油（しょうゆ）や酢を入れたものと思われる水注（すいちゅう）や鳥の餌やりのための餌猪口（えちょく）、ミニチュア製品ではハイハイする赤ちゃんを模した土人形や食べ物を盛る鉢、茶道具と思われるものなども出土しています。

68号遺構からも、陶磁器や土器、銅製品等が出土しました。

地下室は屋敷地内の倉庫的な遺構と考えられ、隣接して2基が検出されました。現況では深さ30㎝と浅いのですが、周辺の土層の地質年代が古いことや遺物の遺存状態が井戸とは異なり、小さな破片が多くなかなか接合しないことから、後世に土地の削平があり、本来あるべき遺物がなくなったという一つの証拠と考えられ、本来はもっと深い地下室であったことが想定されます。両遺構の壁は垂直に立ち上がり、覆土中には焼土及び炭化物が多量に混入していました（写真6）。遺物も被熱しており、火災を受けた可能性を示しています。出土遺物の年代は18世紀代のものが主体で、井戸と比較すると古いことが分かります。

今後、整理作業が進んでいくと、さらに多くのことがわかることと思われます。

なお、当遺跡の発掘調査の状況については、東京動画『東京の地下 「お宝」発掘』でも取り上げられております。一部ではありますが、発掘中の遺跡の様子がありありと映し出されています。インターネット等で御覧いただければ幸いです。

https://tokyodouga.jp/ZUxv47uigyE.html

（金持健司・野口　舞）

写真5　織田家の「木瓜文」のある屋根瓦（066号遺構）

写真3　井戸（066号遺構）遺物出土状態

写真6　地下室（052号遺構）完掘

写真4　井戸（066号遺構）織田家瓦出土状態近接

写真7　北側谷部調査終了

あの遺跡は現在！？ Vol.14

― 国際子ども図書館　台東区上野忍丘遺跡群 国際子ども図書館地点 ―

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。
このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかご紹介します。
もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

JR上野駅から北へ1km、鶯谷駅から東へ1kmほど歩いたところに、国際子ども図書館があります。日本初の国立の児童書専門図書館として、平成12（2000）年に設立されました。建物は明治39（1906）年に建てられた旧帝国図書館庁舎を利用したレンガ棟と（写真1）、平成27（2015）年に新築されたアーチ棟があります（写真2）。今回ご紹介する上野忍丘遺跡群国際子ども図書館地点は、このアーチ棟の建設に伴い、平成23（2011）～24（2012）年にかけて断続的に発掘調査が行われました。

江戸時代の絵図などによれば、調査地点は寛永寺の子院である明王院境内にあたることが分かっており、発掘調査で発見された近世の遺構や遺物の多くは明王院に関連する施設や生活道具と考えられます。それ以外には、中世の「地下式坑」が見つかりました。地下式坑は、地表に出入口である縦坑を掘り、地中に地下室のような空間を設けた施設です。埋葬施設、貯蔵施設など諸説ありますが、実はその性格がよく分かっていません。20号遺構では、地下室の北隅から伏せられた状態の天目茶碗が出土しています（写真3）。

また、近代のレンガ製施設もいくつか見つかっています（写真4）。帝国図書館が建築された際の平面図と照らし合わせると、その位置には仮書庫などがあり、これらの遺構はそれに伴う排水桝であることが分かりました。（小西絵美）

◆調査成果が掲載された報告書
2013『台東区上野忍丘遺跡群 国際子ども図書館地点』東京都埋蔵文化財センター調査報告第279集　東京都埋蔵文化財センター

写真1

写真2

写真1　国際子ども図書館レンガ棟。建物はルネサンス様式の洋館で、東京都の歴史的建造物にも選ばれている。
写真2　中庭から見たアーチ棟。全体がカーブを描く形状の建物で、中には児童書研究資料室や研修室がある。

写真3

東京都教育委員会提供

写真4　東京都教育委員会提供

写真3　20号遺構と出土した天目茶碗。黄色矢印が天目茶碗の出土位置、矢印の上が出入口である縦坑にあたる。
写真4　733号遺構は、レンガの長手面と小口面を交互に積み上げる「イギリス積み」で造られている。

多摩ニュータウンNo.3遺跡は、稲城市百村に所在し、多摩ニュータウン事業区域の東端部にあたります。地形的には、三沢川とその支谷に南北を挟まれた段丘上の平坦面に位置しています。遺跡東側の埋没谷を挟んで東側にはNo.2遺跡があります。

本遺跡は79,500㎡もの広範囲に及びます。発掘調査は1980～1981年と1988年の2回行われました。遺跡南東隅の、北東に下る埋没谷とその南側の平坦面で、調査面積は約5,000㎡です。

調査の結果、旧石器時代の石器、縄文時代の住居跡3軒、陥穴土坑、古代の住居跡7軒が、谷を囲むように検出され、埋没谷からは縄文時代中期の土器・石器が大量に出土しました。これは「土器捨て場」と呼ばれるもので、南側の集落の住人が谷の斜面に生活廃棄物を捨てた跡です。約1万点の土器・石器が検出されています。

写真1　1号住居跡

私が本遺跡の調査に関わったのは1981年、東京都埋蔵文化財センターに入所した年の事で、調査員としての最初の仕事でした。前年度から続く調査に途中参加でしたが、谷部に大量に出土している遺物をみて、驚きと戸惑いを感じつつ、日々の調査に勤しんでいた事を記憶しています。

本遺跡は、東側のNo.2遺跡とともに、縄文時代・古代の大規模な集落が存在する可能性があると言われていました。検出された遺構の数は少数ですが、調査範囲は遺跡総面積からみればわずか数%に過ぎません。西側に広がる平坦面から北東に延びる緩斜面は未調査部分であり、集落本体の様相は未だ不明です。2回の調査で得られた成果から推測するに、埋没谷頭南側で検出された縄文時代中期の住居跡は集落の東の外れで、西側に相当数の住居跡群が展開するものと思われます。古代に関しても同様に西側に大きく広がる可能性が考えられます。

その根拠としては、埋没谷から出土した大量の土器・石器です。住居跡数軒規模の生活用品の量を遥かに凌駕するものであり、相当数の住居があった事を窺わせます。

本遺跡を含む稲城地区には縄文時代中期の集落遺跡が数多く展開しています。現在の京王線若葉台駅北側にはNo.471・No.9・No.520遺跡など、南側には宮添遺跡など大規模な集落があり、その周囲にも小規模な集落などが分布しています。これらの遺跡群からはやや離れて立地しているのが本遺跡で、地形的には尾根を越えた北東側に位置します。

本遺跡周辺の開発事業は現在までに終了しており、今後の調査予定はありません。

縄文時代中期の遺跡群の動向を知る上では、No.471遺跡以下の群とはまた別の群が尾根を挟んだ本遺跡周辺の段丘上に存在していた可能性は大きいと考えられます。その詳細は現在のところ不明と言わざるを得ません。

開発行為に伴う遺跡調査に従事している我々は、調査とともに失われていく遺跡の情報を如何に記録に残し、後世に伝えていくか日々葛藤していますが、その逆に開発行為の行われない地区の情報は得られない、という相反する矛盾に懊悩する状況でもあるのです。

本遺跡の調査・整理・報告書刊行を通じて、社会人になって初めての経験からその後の調査員人生の起点となった日々を改めて振り返るに、苦い思い出が大半を占めますが、調査担当者として、その遺跡の情報をどのように記録し、伝えていくか、そのためにはどのような視点をもって調査していくか、など様々な事を考える機会を与えてくれた遺跡でした。

（丹野雅人）

写真2　遺跡調査区南側

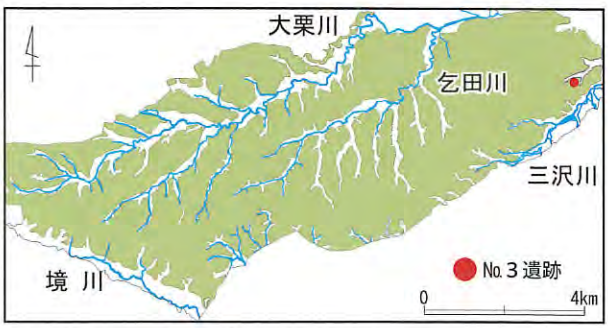

図1　多摩ニュータウンNo.3遺跡位置図

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

#41 多摩ニュータウン No.3遺跡

「夜」の発掘隊

公益財団法人福島県文化振興財団（以下福島県財団）に出向して都合３年になる。今回は鹿屋敷遺跡（双葉郡浪江町棚塩）（写真１）の発掘調査を報告する。鹿屋敷遺跡は昭和 61 年以来４回にわたり調査が行われている。その結果、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、そして鎌倉・室町時代と重層的な遺跡であることが判明している。埋蔵文化財調査の主力はマンパワーである。調査員だけの発掘は不可能で、土の掘削・運搬、土器や石器の掘り出し、写真清掃作業など、力仕事から根気の必要な繊細な作業まで多くの作業員が必要となる。ところが、浪江町は平成 29 年３月 31 日に原発事故に伴う避難指示の部分解除が行われたばかりで、住民の帰還が遅れていた。そのため、地元作業員の募集を行っても集まる見込みは極めて低く、募集から雇用までを民間の発掘支援会社に委託した。

8 月　今回の５次調査範囲は 6,800 ㎡という広さがあるが、台地の平坦面を直線的に掘るというものであり、さほど問題はないと予想していた。しかし、これは調査開始後直ぐに打ち砕かれることとなった。発掘対象地域は、畑地や山林であり、畑地は山林を開墾したものだが、耕作を停止後荒れ、背丈を超える雑草や「葛」に覆われていた。しかも開発範囲内には、地権者との合意が未了の地点もあり、発掘作業の開始を阻む案件が山積していた。当初計画では青葉ホトトギスの５月からの予定であったが、着手したのは蝉のなく８月となった。そのため、発掘作業はまず地表の「葛」などの除草作業から開始し、その後パワーショベルによる表土剥ぎ作業を行い、遺構検出作業を進めた。ところが、至る所に開墾時の伐根による攪乱が広がり、その深さも遺跡面に達するものが多く、調査区が凸凹となっていた。

こうした局面にさらに輪をかける事態が生じた。何者かがこの凸凹を増幅させているのだ。昼間平らにした地面が、翌朝には凸凹になっている。発掘調査では遺跡を保護するために地面をシートで覆い、それを土嚢で押さ

写真１　鹿屋敷遺跡南半部（左上は太平洋、上は請戸川の河口付近、手前は棚塩の大地）北より撮影

写真２　引き剥がし、破り、あたりかまわず掘る

えるのが一般的だ。このシートや土嚢が破られ、地面が掘り返されている。そこには、犯人の足跡が残されている。あきらかに偶蹄目の足跡複数、そう、イノシシ部隊である（写真２）。人間が調査を終える夕方以降、「夜の発掘隊」が地面を「掘り掘り」していたのである。いらぬ助人、余計なお世話とはこのことである。

そこで、まず浪江町産業振興課に相談した。町では鉄製の大形檻（はこわな）を用意していた。ところが、あちこちから駆除要請が出ている。「わな」の数には限りがあり、遺跡より人の方を優先したいとのこと。そこで、インターネットなどでイノシシ対策を手分けして調べた。一番は電気柵のようだが、次善の策として青色回転灯と「オオカミのおしっこ」を採用することとした。前者はソーラー発電なので配線も不要である。後者はインターネット通販で販売している。容器に小分けしてぶら下げると、その匂いが過去の記憶を呼び起こさせ、遺伝的にオオカミを忌避する性質を利用するものらしい。この両者を設置したところ部隊の襲撃はぴたりと止んだ。

（及川良彦）

～次回へ続く～

※今号の表紙：港区大和芝村藩織田家屋敷跡遺跡で検出された江戸時代の削平面。欅の大木が遺跡を見守るように枝を揺らしています。

たまのよこやま 117　　2019 年 7 月 15 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 https://www.tef.or.jp/maibun/